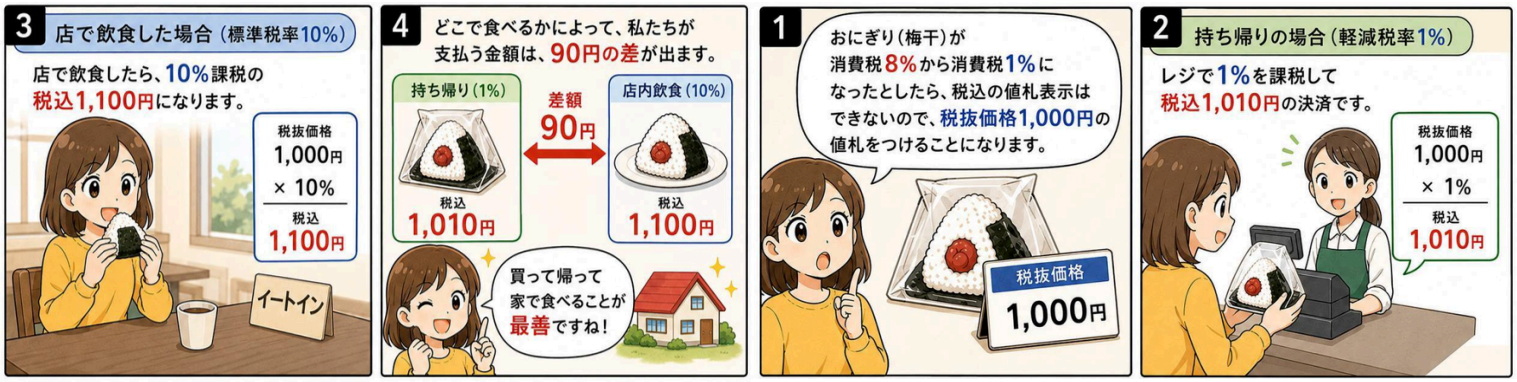
チーム・パシュート通信 VOL.5

消費税減税、１%の違和感



「「ねえねえ、今日の夕飯は、買って帰る？ 食べに行く？」～消費税減税で見落としたもの

政府は来年4月から食料品の消費税率を2年間、１%にすることを発表し、国民会議ではこの１%分を補助金にするなど議論が続いていますし、「誰が公約を守ったのか、守らなかったのか」といった応酬も繰り返されています。

政府案から見えてくる問題点は飲食店でのテイクアウトと店内での飲食で税額が大きく変わる、2年後に税率を戻せるのか、農家の消費税分の負担増など多々あります。さらには、事業者側の事務負担も増大します。現在でも標準税率10%と軽減税率8%の区分管理が必要ですが、これに1%が加わることで、経理処理はさらに複雑になります。加えて、インボイス制度の経過措置により、適格請求書発行事業者ではない免税事業者からの仕入れについては80%控除や50%控除といった計算も必要であり、実務負担はますます煩雑になります。

こうした問題が見えているものの、私たちはこれから起こりうる消費税減税の問題をより広く、背景にある社会の課題、人の意識や人間関係の移り変わりや変化に目を向けてみるべきではないでしょうか？

「社会保障の充実」がどうして「減税」になったのか？

これまで消費税の議論には廃止をめぐるものだけでなく、社会保障の充実させる手段として消費税を肯定し、消費税のデメリットと言われてきた逆進性の改善のため「給付付き税額控除」の導入をめぐる議論、さらなる増税論もありましたが、減税に流れが変わりました。

社会の雰囲気を変え、減税論が広がった背景に2つの理由があります。一つは長く続いた「デフレ経済」から「インフレ経済」への変化です。2022年春以降、ウクライナ戦争や円安を背景に、食品やエネルギー価格が急騰、そこから国民の生活困窮が始まりました。長引いたデフレから急激なインフレへの転換、そして実質賃金のマイナスが、国民の我慢の限界を突破させ「消費税は社会保障の貴重な財源」という聖域を維持できなくなりました。

2つ目の理由は、「社会保障充実のため」という大義名分への疑念があります。それは、「集められた消費税が本当に社会保障に使われているのか」という不信感です。消費税が10%に増税された後も、医療費の窓口負担増、年金支給額の実質抑制、雇用保険料の値上げなどが続いていることが疑念を大きくしています。これは高齢化が急速に進展していることが影響しています。

こうした増税を許さない政治不信によって、政治の主語が“より良い国民生活”ではなく“その時の流行”にすり替わってしまっている象徴のような事案が、今回の食料品の消費税1%案だと私たちは感じています。正直、私たちが得するのかわかりません。それが違和感につながるのです。

生活に響く消費税、世界につながっているのだと気づかないといけない

目先の損得で消費税減税が決まっていっていますが、本来ならばどのような社会を目指し、どのような人たちを支援したいのか。そして次の世代に何を残したいのかという議論が先にあるべきではないでしょうか。税率はあくまで手段です。目的ではありません。

実際に手取りを減らしている「子ども・子育て支援金」の徴収方法や負担のあり方も含め、私たちの家計全体を俯瞰して見直してほしいと思います。現状では家計の無駄遣いを調べずに、インフレでパニックになり、「給料をもっと家計に入れろ」「嫌だ」と口論になる家族のようなものです。

さらに言えば、日本は巨額の財政赤字を抱えており、低金利であるため、財政破綻の危険性が高まっていると言われます。そして、国際金融市場においては変化できずに衰退する日本に円安という形で不信を突きつけます。エコノミストの中には円は最弱通貨だという方もいらっしゃいます。単に消費税の減税だけを議論できる状況ではないのです。消費税は国際金融市場、家計負担や社会保障、医療介護、中小企業支援、地方財政、子育て政策、税制度全体の公平性といった複数の視点を同時に考える必要があるのです。

しかしながら、政治の世界だけでなく、社会全体で「シングルイシュー化」が進んでいるように思います。一つの課題だけに注目し、それを善悪や賛否で判断しようとする傾向です。

だからこそ、こうした複雑に進行する様々な関係性を正面から受け止め、様々な階層、年齢、様々の方々と経験や感動や反省や失敗に耳を傾け、苦労や課題を共有してゆく小さな場の創出の蓄積は確実に小さな行動の変化を呼び起こすと私たちは信じているのです。

終わりに、私たちが望むべき国会とは、食料品の消費税率「ゼロか1%か」を競う場所ではありません。複雑な課題を複雑なまま受け止め、異なる立場の人々が知恵を出し合いながら、より良い未来を模索する場所です。

そして、私たちが選ぶべき国会議員とは、耳触りの良い答えを示す人ではなく、社会全体を見渡しながら、その複雑さを国民と共に考え続けることのできる人ではないでしょうか。

※　AIで美化されすぎてあせるメンバー
この５人で文章を考えています

チームパシュートとは

私たちは、一般社団法人ソブリン・ムーブメントの活動チーム「チームパシュート」です。

チームパシュートという名前は、スピードスケートの団体競技に由来しています。この競技では、選手たちが互いを支え合いながら隊列を組み、それぞれの役割を果たしながらゴールを目指します。私たちも同じように、一人ひとりが得意なことや経験を活かしながら、より良い社会の実現に向けて活動しています。

私たちが取り組んでいるのは、「主権者運動」です。政治や社会の課題を誰か任せにするのではなく、自分たちの暮らしと結びつけて考え、学び、語り合い、行動することを大切にしています。発信する人、企画する人、地域で対話を広げる人など、それぞれが自分らしい役割を担いながら活動しています。

社会を変えるのは特別な誰かではなく、私たち一人ひとりです。チームパシュートは、仲間とともに学び、支え合いながら、一歩ずつ未来へ進む主権者のチームです。

連絡先　担当：吉田理子　（070-5542-0443）